

意見陳述書

事件名 平成16年(行ウ)第68号
「公金支出差止等請求事件」

2007年6月12日

千葉地方裁判所 御中

原告

千葉市若葉区千城台北3-8-1

高野 晴美

準備書面第(13)について、その概要について意見陳述します。

1. 本日、原告が提出した準備書面(13)は、主に治水問題についての被告の見解、原告の主張に対する反論が展開されている被告準備書面(9)に対する再反論を行っているものです。
2. 意見陳述では、本日提出した準備書面のうち次の二点、すなわち、
利根川の基本高水流量毎秒22,000 m³という数字が全くの虚構であること
ハッ場ダムの洪水調節計画は、実際に生じる洪水と乖離したものとなってしまうことについて、簡潔に解説します。
3. 原告は、利根川の基本高水2万2000 m³計画は、計画の基礎としているカスリーン台風再来時の洪水流量の推定方法に誤りがあり、過大に計算されたものであるという主張をしています。
これに対し、被告は、カスリーン台風と同規模の台風が来襲すると、八斗島地点におけるピーク流量は今でも毎秒22,000 m³になる、そのためにハッ場ダムなど数多くのダムが必要になるという趣旨の反論を行っています。
しかし、このピーク流量毎秒22,000 m³というのは、机上の計算で求めたものに過ぎず、その根拠は極めて薄弱です。

4 . 被告は、八斗島地点におけるピーク流量が今でも毎秒 22 , 000 m³ となるとしています。八斗島とは、この図（添付 3）のこの位置にあります。利根川治水計画の基準点となっている地点です。

被告は、昭和 22 年のカスリーン台風による洪水流量は、上流域で相当量の氾濫が生じていた状態での流量であった。昭和 55 年改定の利根川水系工事实施基本計画では、昭和 22 年以降の上流部の河川改修・開発等による流出増があるため、カスリーン台風が再来し、昭和 22 年当時と同じく上流にダムがないという条件で流出量について検討を加えると、八斗島地点の基本高水ピーク流量は毎秒 22 , 000 m³ となった。」とこのように主張しています。

5 . この被告の主張においては、カスリーン台風時の利根川上流域での出水は毎秒 2 万 2000 m³ 相当の流量であったが、上流域で相当量の氾濫があったため、基準点の八斗島地点での河道での洪水流量は 1 万 7000 m³（国の推定値）に止まったとの事実が想定されている。

ただ、そもそも 1 万 7000 m³ という推定値自体、異常に大きい流量であることは、実際の八斗島地点の流量を見てみるとわかります。

これは八斗島地点の年間最大流量をグラフ化したものですが、カスリーン台風以降、八斗島地点での最大流量が 1 万 m³ を超えたことは 1948 年のただ一度だけ、その後は半世紀にわたって 1 万 m³ を超えたことすらないので。

6 . カスリーン台風時の 1 万 7000 m³ という推定値自体の信頼性に問題があるということはここではおくとして、同じ規模の台風が今度来襲すれば八斗島地点での流量が 2 万 2000 m³ となるという被告や国土交通省は言うのですが、では、この 5000 m³ の増加の理由は何かと言うと、先ほども述べたとおり、カスリーン台風時には八斗島の上流域の河川改修が不十分だったためかなりの氾濫があったが、その後、上流部においては、河川改修・開発が行われた結果、氾濫した水量とほぼ同じ量の流出量増加があるというものです。上流部での氾濫がなくなったから、八斗島での流量が増えるというのです。

7 . ところが、実際には、国土交通省は現在でも八斗島上流域で、大

量な氾濫が生じることを想定しています。

これは、関東地方整備局が、2005(平成17)年3月に発表した「利根川水系利根川浸水想定区域図」です。現時点でカスリーン台風が再来した場合、破堤によって浸水がどの範囲に広がるかを示しているものです。

色のついている部分が、浸水が想定されている区域を示します。

8. こちらの図は、浸水想定区域の計算に使用した資料を情報公開で求めたものです。八斗島地点における流量の変化を示したものです。

これを見ていただくとおわかりのように、八斗島地点の洪水ピーク流量は $16,750 \text{ m}^3/\text{秒}$ となります。

9. ところで、国土交通省は、利根川の治水計画では、カスリーン台風の洪水時、八斗島地点のピーク流量は、 $22,000 \text{ m}^3/\text{秒}$ になると想定しています。にもかかわらず、なぜ、浸水想定区域図の作成に際してはピーク流量を $16,750 \text{ m}^3/\text{秒}$ としたのでしょうか。

この点について、関東地方整備局は、「現況の(河川)断面で、現況の洪水調節施設で流出計算を行った場合、上流部で氾濫したうえで八斗島のピーク流量は $16,750 \text{ m}^3/\text{秒}$ となる。」という補足説明をしています。

この現況の洪水調節施設とは、既設6ダムのことを指します。そして、国交省は、この既設6ダムの洪水調節量は、八斗島地点では $1,749 \text{ m}^3/\text{秒}$ と計算しています。とすると、国交省は $22,000 \text{ m}^3$ から、八斗島地点のピーク流量 $16,750 \text{ m}^3$ 、そして、上流ダムでの調節量 $1,749 \text{ m}^3/\text{秒}$ を引いた $3,501 \text{ m}^3$ は、現在でも、利根川の上流域で氾濫すると想定していることとなります。

10. しかし、国交省は、先ほどのものとおり、利根川の治水計画では、八斗島上流域での河道整備等により氾濫流量が減少したため、現時点では、6ダムでの洪水調節がないとすれば、八斗島地点には、 $2万2000 \text{ m}^3/\text{秒}$ が流下すると全く矛盾した説明をしています。

従前の主張を覆す説明を国土交通省自らが作成した資料がしているのです。

原告らは、この国交省の矛盾した説明の真相を究明するため、先ほどの「浸水区域図」の計算を行う際、利根川上流部のどこで、どれだけの氾濫があるのか、その根拠を示す資料・データの開示を関東地方整備局に求めました。ところが、そのような資料・データはないという不開示決定をされています。

しかし、上流域でかつて大氾濫した事実があり、かつ、現在でも大氾濫が起るとの想定は、利根川の治水計画を策定する際、根幹となる事柄です。

こうした重大な事実を認定する以上、根拠資料・データがない、ということはありませんし、もちろん、一旦作成したら廃棄をするなどということも考えられません。

もし、資料がないというのであれば、そうした計算作業を行ったのかどうかさえ疑わしいということになります。

11. にもかかわらず、国交省は、なぜ八斗島上流部における氾濫箇所などの資料・データの開示を拒むのでしょうか。考えられることは、2005年の計算では、利根川上流部での氾濫が実際にはさほど大きくなく、それを公表できないことにあるのではないかということです。実際、原告らは八斗島上流部を実地調査しましたが、氾濫するような箇所はほとんど見当たりませんでした。国交省も2005年の計算では、上流部での氾濫をほとんど考慮していないのではないのでしょうか。

八斗島の計算上の洪水ピーク流量 $16,750 \text{ m}^3/\text{秒}$ に、既設6ダムの調節量 $1,749 \text{ m}^3/\text{秒}$ を加えた数字が約 $18,500 \text{ m}^3/\text{秒}$ 。そこに氾濫量を加えても、 $22,000 \text{ m}^3/\text{秒}$ を大きく下回る値しか得られなかった。しかし、1980年の利根川治水計画、工事实施基本計画策定時の $22,000 \text{ m}^3/\text{秒}$ を変更する訳にはいかない。そこで上流部で氾濫したという捕捉説明を行った。そのためのデータが存在せず資料開示を拒んでいるのではないかと考えられるのです。

12. 以上述べたとおり、1980年の工事实施基本計画策定時に設定された $22,000 \text{ m}^3/\text{秒}$ の根拠は、2005年に公表された国土交通省自身が作成した資料によって否定されているのであって、その信用性は

全くないと言うべきなのです。

- 1 3 . 次に八ッ場ダムが治水対策として意味のないダムであることについて、新たに入手をしたデータに基づいて指摘をしたいと思いません。

利根川の治水計画は、利根川本川だけでなく、吾妻川等の支川の想定流量も含めて策定されています。

吾妻川の場合、流量観測所は村上地点と岩島地点の2箇所がありますが、今まで原告らは、吾妻川の流量観測データとしては、村上地点のものしか入手していませんでしたが、今回、岩島地点の流量データも情報公開によって入手することができました。

岩島地点はここにあります。

八ッ場ダムの計画地の直下に位置しています。この下流に村上観測所があり、さらにその先で吾妻川は利根川本川に合流しています。八斗島はさらにこの下流にあります。

- 1 4 . さて、吾妻川上流部では、2001年9月に100年に1回の雨量に相当する大雨がありました。利根川の治水計画は、利根川本川については200年に1回の最大洪水流量を想定していますが、吾妻川等の支川については100年に1回の最大洪水流量を想定して策定されています。この2001年9月に降った大雨の岩島地点の観測データによって、利根川治水計画、八ッ場ダムの洪水計算の妥当性を検証できるということになります。

- 1 5 . 吾妻川の場合、八ッ場ダム予定地上流域の1/100の3日雨量は354mmと設定されていました。

この、2001(平成13)年9月8~10日にかけての3日間で、平均約340mm.程度の降雨量を記録したのです。まさに、2001年9月の降雨量は、治水計画で想定された、まさに100年に1回にほぼ等しい降雨量だった訳です。

- 1 6 . この図は、八ッ場ダムによる洪水調節計画と2001年9月の観測流量をグラフ化したものです。一番上の赤い線が、利根川治

水計画での、100年に1度の3日雨量があったとき、ハッ場ダムに最大で3,900 m³/秒の洪水が流れ込むことを想定しています。

ハッ場ダムは、そのうちの2,400 m³/秒を調節し、下流に最大で1,500 m³/秒を流す、放流することになっています。青い線が放流量をあらわします。

また、緑の線が2001年9月、100年に1度の3日雨量に相当する降雨量が実際にあった時の岩島地点における観測流量です。岩島地点における最大流量は1,247 m³/秒でした。流域面積はダム予定地が708k m² 岩島が747k m²となっていますので、ハッ場ダム予定地での最大流量は、比例計算すると約1,200 m³/秒程度であったと推測されます。ところが、治水計画では1/100の3日雨量が降ったときには、最大で3,900 m³/秒の洪水がダムに流れ込むことになっています。

17. ハッ場ダム流入量の計算値は観測値と比べてあまりにも過大であるといえます。

もちろん、同じ3日雨量でも、雨量の時間毎の分布が違えば、洪水ピーク流量は変わってきます。治水計画で想定されている3日間の雨量分布と2001年9月の実際の雨量分布とは差があるのですが、しかし、その点を考慮しても、ハッ場ダムの流入量は2倍以上の過大計算となっていることが、今回の岩島地点観測データの検証によって明らかになっています。

ハッ場ダムの計画流入量3,900 m³/秒は、架空の洪水計算モデルで求められたものに過ぎず、そのような架空のモデルによってハッ場ダムの洪水調節計画が作られているのです。

18. 今回、治水計画において吾妻川の100年に1回の3日雨量とされている354mmに相当する降雨量があり、かつ、そのデータが情報公開されたため、国交省の計算モデルの妥当性を検証することができました。その検証の結果、明らかになったことは、ハッ場ダム流入量の計算は、実際の観測値とかけ離れているということです。

利根川本川の200年に1回の3日雨量を実際に観測したデータはまだない訳ですが、同様に国交省の用いている計算モデルで求めら

れた利根川・八斗島地点の 22000 m³ / 秒という最大流量も、現実とは乗離したものになっている可能性が極めて高いと考えられます。

以上

ハッ場ダムの 治水に 関する再反論と補充

2007.6. 12
ハッ場ダム住民訴訟 千葉

準備書面の主張のうち、下記の2点について陳述する。

- ① 利根川の基本高水流量 $22,000\text{m}^3/\text{秒}$ は虚構である。
- ② ハッ場ダムの洪水調節計画は実際の洪水と乖離している。

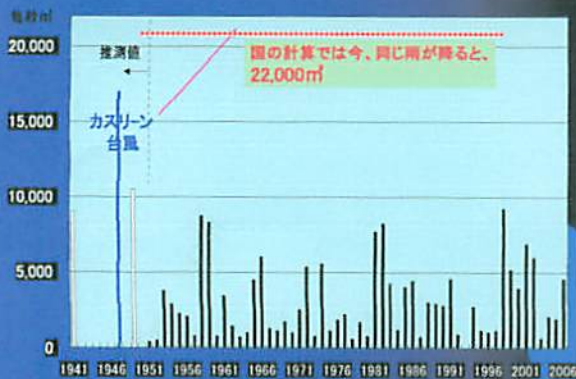
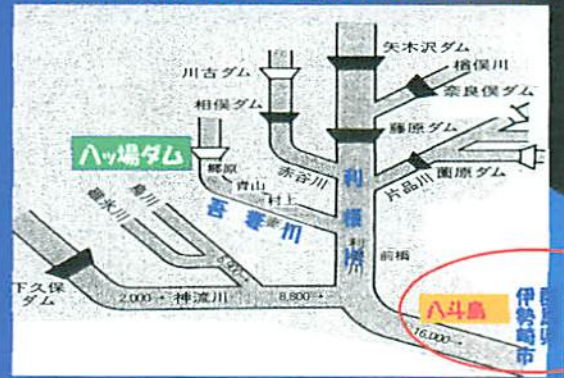
利根川の治水計画

カスリーン台風級の洪水が再来すると、
ピーク流量は毎秒 $22,000\text{m}^3$ になる
〔洪水の基準点：八斗島(やったじま)〕

それに対応するために、ハッ場ダム等の
数多くのダムが必要

ところが、 $22,000\text{m}^3/\text{秒}$ は机上の計算で求
めたものに過ぎず、非科学的かつ作為的

利根川治水計画の基準点「八斗島」の位置

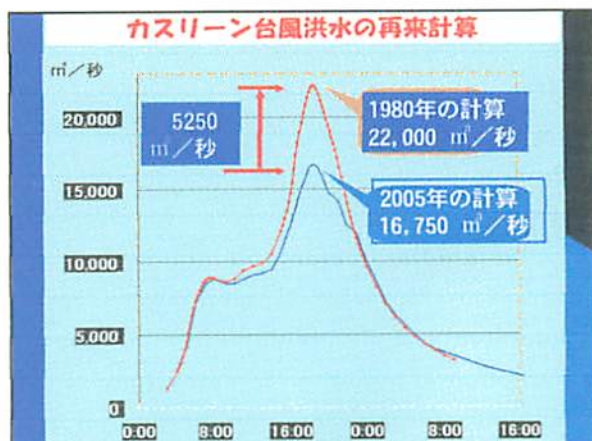
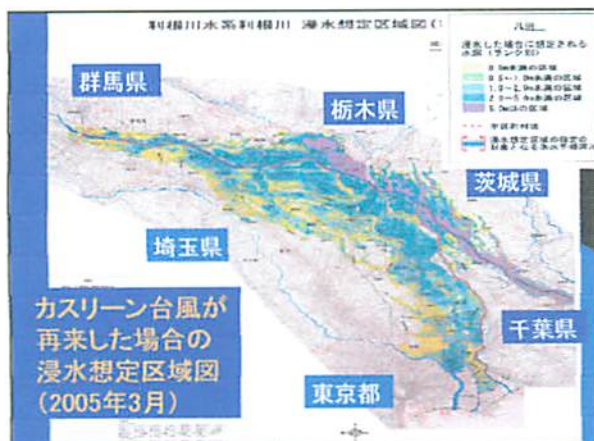


被告の主張する22,000トンの根拠

- 1947年の実績値 $17,000\text{m}^3/\text{秒}$
- カスリーン台風洪水再来の計算値 $22,000\text{m}^3/\text{秒}$
(1980年の工事実施基本計画策定時に計算)

被告の $5,000\text{m}^3$ 増加の理由

上流部の河川改修によって氾濫がなくなったから、 $5,000\text{m}^3/\text{秒}$ 増加する。



なぜ？

八斗島地点のピーク流量が22,000m³/秒ではなく、16,750m³/秒になるのか？

国交省の補足説明

「上流部で氾濫したうえで 八斗島のピーク量は16,750m³/秒となる。」

現況ダムによる効果は1,749m³/秒。

$22,000 - 16,750 - 1,749 = 3,501$ m³/秒は

現状でも八斗島上流部で氾濫するといっている。

「国交省の自己矛盾

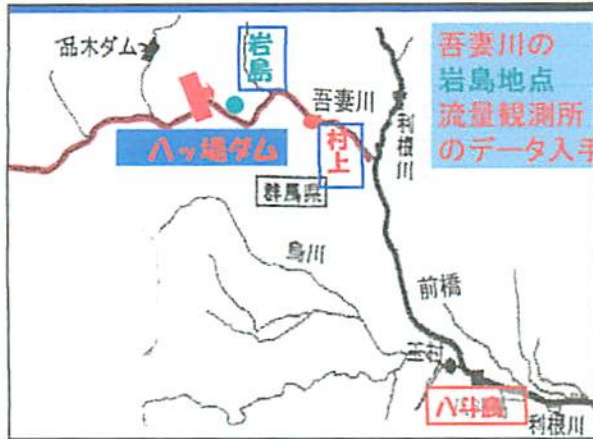
八斗島地点で22000トンとした根拠はどこへ？

- 真相を究明するため、八斗島上流部の氾濫箇所、氾濫区域等のデータを情報公開請求した、
- 文書不存在で不開示。
- 八斗島上流部の氾濫箇所等のデータがなくて、どうして16,750m³/秒が求められるのだろうか？

氾濫箇所のデータ開示を拒む理由は？

- 原告の現地調査では、氾濫するような箇所は見当たらない。
- 2005年の計算では、上流部での氾濫は考慮されなかったのでは？
- 計算値が22,000m³/秒より小さくなったので、上流部で氾濫したことにはしていないか？

以上のおり、22,000m³/秒の根拠はきわめてあやふやなものであって、国交省自身の資料によって否定されている。



2001年9月に 吾妻川上流部で
100年に1回の雨量に相当する大雨が降った。

- 利根川本川は200年に1回、吾妻川のような支川は100年に1回の雨量で計画を策定する

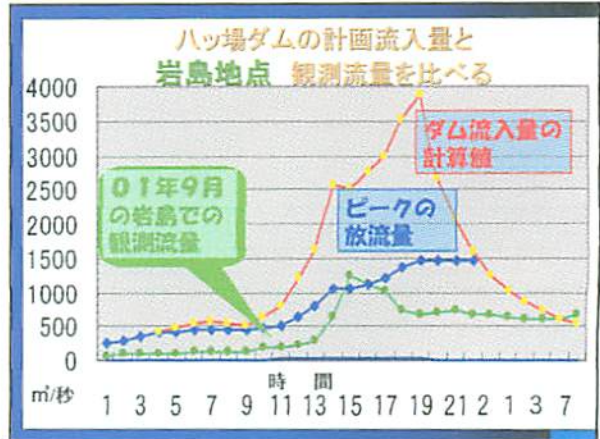
↓

ハツ場ダムの洪水計算の妥当性を2001年9月の岩島地点の観測データで検証することができる。

岩島地点に降った大雨の観測データでハツ場ダムの洪水計算の妥当性を検証することができる

2001年9月に吾妻川上流部で
100年に1回の雨量に相当する大雨が降った。

- 2001年9月の3日雨量 約340mm
- ハツ場ダムの洪水計算
100年に1回の3日雨量 354mmを想定



ハツ場ダム流入量の計算値は観測値と比べて あまりにも過大

- 雨量分布の違いを考慮しても、ハツ場ダム流入量は2倍以上の過大計算になっている。
- ハツ場ダム流入量3,900m³/秒は架空の洪水計算モデルで求められたものに過ぎない。
- そのような机上の計算でハツ場ダムの洪水調節計画がつけられている。

- 2001年9月に吾妻川上流部で100年に1回の雨量が降ったので、国交省の計算モデルの妥当性を検証することができた。
- その結果、ハツ場ダム流入量の計算は洪水流量の観測値とかけ離れていることが明らかになった。
- 同様に、利根川・八斗島地点の22,000m³/秒も、現実と乖離したモデルで求められた可能性が高い。